

持続可能な発展のための教育 —ESDの学習方法に関する総合的研究—

Education for Sustainable Development: Comprehensive Research on Study Methods of ESD

多田 孝志
Takashi TADA

Abstract

ESD (Education for Sustainable Development) helps nurture ideal global citizens for the 21st century.

So as to promote character-building which ESD seeks to accomplish, it is necessary to critically examine the learning methods proposed by ESD-related organizations. It is also necessary to analyze previous studies on learning theories and pioneering education practices at home and abroad. This paper proposes learning methods based on integrated wisdom and system thinking, as practical means for character building which ESD strives to achieve. This paper presents various effective learning methods to motivate students, based on ESD learning methods and today's students' general attitudinal tendencies.

Keywords : education for sustainable development, learning methods, integrated wisdom, system thinking, collaboration learning

キーワード : 持続可能な発展のための教育、学習方法、統合の思想、システム思考、協同学習

1 持続可能な発展のための教育 : ESDとは

(1) 経緯

2002年に開催された“持続可能な開発に関する世界首脳会議(ヨハネスブルグサミット)”の実施計画の議論の中で、わが国が、「持続発展教育(ESD)の10年」を提案し、各国の政府や国際機関の賛同を得て、実施計画に盛り込まれることとなった。わが国は、2002年の第57回国連総会に、2005年からの10年間を「ESDの10年」とする決議案を提出し、満場一致で採択された。この国連決議では、「ESDの10年」の推進機関としてユネスコが指名された。そこで、ユネスコは、2005年9月に国際実施計画を策定した。なお、国際実施計画策定に際し、日本ユ

ネスコ国内委員会はユネスコ事務局長に対し、国際実施計画に盛り込むべき事項やユネスコの活動に関する提言を行った。

他方、わが国では、「ESDの10年」関係省庁連絡会議を内閣に設置した。同連絡会議は、2006年3月に、国内実施計画を策定した。2007年10月には第34回ユネスコ総会において、わが国がドイツとともに、ESDの更なる推進のための決議案を提出し、採択された。なお、これまで、ESDは「持続可能な開発のための教育」と訳されていたが、日本ユネスコ国内委員会では、国内への普及促進を目指して、より簡単に、「持続発展教育」という名前を使っている。⁽¹⁾

(2) 理念

社会・文化的視点 環境の視点、経済的視点から、より質の高い生活を次世代も含む全ての人々にもたらすことのできる状態の開発を目指したこの教育は、「持続可能な未来と社会の変革のために行動できる人」の育成を目的に掲げた。さらに持続可能性を基盤とし、「未来に希望がもてる社会を築く」ため、「自分の考えをもって、新しい社会秩序を作り上げる地球の視野をもった市民の育成」の必要を示した。⁽²⁾

日本ユネスコ国内委員会は、ESDの目標を次のように示している。

- ・ 持続可能な発展のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれること
- ・ すべての人が質の高い教育の恩恵を享受すること⁽³⁾
- ・ 環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような価値観と行動の変革をもたらすこと

こうした目標を達成し、持続可能な社会を実現するためには「Think Globally Act Locally」(地球規模で考え、足元から行動する)が大切であると言われている。「持続可能な開発」は一部リーダーによって与えられるものではなく、地域に暮らす様々な立場の人々が、持てる知恵や力を出し合い、試行錯誤を重ねながら共に作り上げていくものである。だからESDには、子どもから大人まで全ての人々に、「社会に参画する力」を育むことが求められる。私たち一人ひとりが、世界をよりよく変えていく力と責任があるという信念を持ち、今の社会の現実と課題を認識・共有し、望ましい未来の姿(=持続可能な社会)とは何かを話し合い、そこで描かれた将来像を共通の目標として、その実現に向けて取り組む、そのような教育・学習・実践活動がESDである。⁽⁴⁾

(3) 関連庁連絡会議の「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画報告書の示す方向

2009年にドイツで開催されたESD世界会議で取りまとめられたボン宣言で、「より強力な政治的コミットメントと断固たる行動が求められている」と記述された。これを受け、日本政府

は有識者から成る「国連持続可能な開発のための教育の10年」円卓会議を開催して意見交換も行いながら2009年までの前半5年の評価を行い、それを基に実施計画の改訂を行ってきた。筆者もこの会議に有識者委員として参加した。円卓会議は、平成21年6月3日、国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画報告書を提出した。本報告書によれば改訂のポイントは以下のとおりとされた。

- ・ESDの普及促進をさらに加速させ、ESDの「見える化」、「つながる化」を推進。
- ・新しい学習指導要領に基づいたESDの実践、ESDの推進拠点としてのユネスコスクールの活用など、学校教育を活用してESDを推進。
- ・新しい公共の概念との関係を明記。
- ・2014年の最終年の先も見据えたESDの更なる促進。

また「政府としては、関係省庁が連携してこの改訂した実施計画に掲げられた諸施策を着実に実施することにより、ESDの更なる積極的な推進を図り、もって、あらゆる人々が、質の高い教育の恩恵を享受し、また、持続可能な将来と社会の変革のために求められる価値観、行動、及びライフスタイルを学び、各主体が持続可能な社会づくりに参加する世界を実現することを期するものです」と記している。⁽⁵⁾

本報告書で注目されるのは、ESDにより「育みたい力」を明示した点である。報告書は、以下に記している。

ESDにおいては、問題や現象の背景の理解、多面的かつ総合的なものの見方を重視した体系的な思考力（システムズシンキング（systems thinking））を育むこと、批判力を重視した代替案の思考力（クリティカルシンキング（critical thinking））を育むこと、データや情報を分析する能力、コミュニケーション能力、リーダーシップの向上を重視することが大切です。また、人間の尊重、多様性の尊重、非排他性、機会均等、環境の尊重といった持続可能な開発に関する価値観を培うことも重要です。

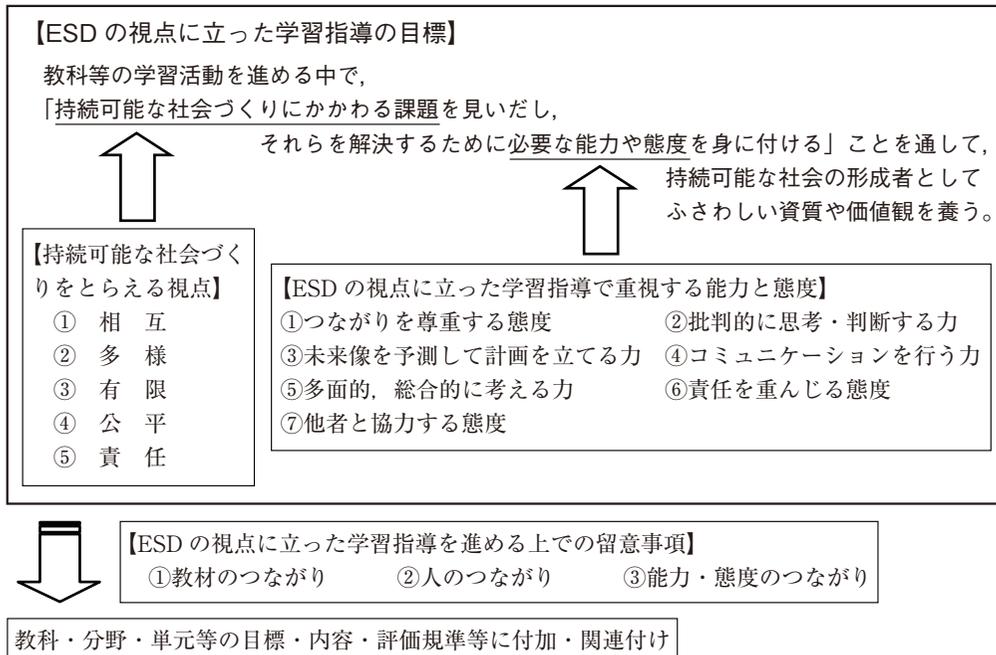
このような技能や価値観を培い、市民として参加する態度や技能を育むことが大切です。なお、小中高等学校の総合的な学習の時間は、体験を通じて学校等で学んだ知識の定着、思考力、判断力、表現力、問題解決能力の育成、調べ方やまとめ方、発表の仕方などを身につけさせることを目指して行われており、ESDにおいて重視すべき点と重なるため、その充実が必要です。（（5）育みたい力）

(4) 国立教育政策研究所の取り組み

国立教育政策研究所は平成21年に「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関

する研究」プロジェクトを発足させ3年間にわたる取り組みを行っている。平成22年9月、中間報告書が刊行された。筆者も有識者として参加したが、このプロジェクトの特色は学校での実践研究への具体的な取り組みのあり方を明らかにすることにあった。その具体的手法は、ESDの理念に基づく育むべき資質・能力の育成を意図した視点整理型アプローチ、および各実践事例のESDの視点からの意味を明らかにするチェックシート型アプローチとに大別ができる。下図は視点整理型アプローチにおけるESDの視点に立った学習指導の枠組みを表した図である。本論考に関わって、特に注目されるのは、ESDの学習方法を検討する基本になる事項の提示である。(6)

ESD の視点に立った学習指導を進める上での枠組み



(学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究中間報告書 10 頁)

2 ESDに関わる学習方法の批判的考察

関連庁連絡会議の実施計画報告書および、国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関するプロジェクト中間報告書の記述を中心に我が国のESDの推進における課題を批判的に考察する。

(1) 関連庁連絡会議の実施計画報告書の批判的考察

実施計画書の学習方法に関する事項を引用してみよう。

学び方・教え方については、「関心の喚起→理解の深化→参加する態度や問題解決能力の育成」を通じて「具体的な行動」を促すという一連の流れの中に位置づけることが大切です。これらの過程では、単に知識の伝達にとどまらず体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチとすることが大切です。また、活動の場で学習者自発的な行動を上手に引き出す「ファシリテート」の働きを重視することも大切です。これらのアプローチを通じて、学習者の参加する態度や問題解決能力を育み、参加する機会の提供にも努める必要があります。このような学び方、教え方を実践するためには、参加体験型の学習方法や合意形成の手法を活用することが効果的です。高校や大学等の中等教育、高等教育においては、仕事や活動の現場で、必要な知識や技能を習得させるオンザジョブ・トレーニング (on-the-job training) により、具体的な実践を通じて学ぶという方法も効果的です。教育や学習の現場では、学ぶ側の意見を取り込みつつ、進めることが大切です。教育や学習の対象者すべてに一斉に同じ方法をとるのではなく、可能な限り一対一の対話を重視して行うよう努めることが大切です。

((4) 学び方・教え方)

実施計画報告書は、教科横断・統合的な取り組みの方向、問題解決型アプローチ、参加型学習、体験的活動の重要性、対話力育成の重視などの提言を行っており、共感できる。ただ、次の点に課題があるといえよう。

- ・さまざまな学習の方法は提示されているが、それらの学習方法の基調をなす理念についての検討が十分とはいえない。
- ・従前の学習論でも提示されてきた問題解決型アプローチ、参加型学習が提唱されているが、21世紀の望ましい人間形成のための教育としてのESDとしての新たな視点や考え方が加味されていない。
- ・対話力の重視の一般的な提言にとどまり、希望ある未来社会に担い手として習得すべきグローバル時代に対応した対話力の方向についての説明に欠ける。

(2) 国立教育政策研究所の中間報告書における「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力と態度」の批判的考察

中間報告書は、「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力と態度」として提示している事項について若干の検討を加えてみよう。

- ①判的に思考・判断する力 ②未来像を予測して計画を立てる力 ③多面的、総合的に考える力 ④共創型コミュニケーションを行う力 ⑤個を確立しつつ多様な他者と協力する態度 ⑥つながりを尊重する態度 ⑦当事者意識をもち責任を重んじる態度 ⑧自己成長・変革力 ⑨イメージ・響感力

下線の部分は筆者が追加すべきと考える項目である。コミュニケーションは分類すれば、真理探究・対応・指示伝達・共創型に分類できる。ESDに重要なのは対立や異見をむしろ活用し、新たな解決策や知恵を生み出す共創型である。他者と協働する前提には自己の確立がなければならない。責任を重んじる態度とは、倫理観のみでなく、ESDの基調である主体的行動力を促すことであり、それは当事者意識をもつことにより高まるのではなかろうか。

自己成長・変革力・臨機応変の対応力は、他と関わっていくための基本であり、予想できない未来に対応するために必須の資質、能力であり、重視されねばならない。筆者は、知育・徳育・体育の基盤には感育が必要と考えている。またこれまでの多様な異文化を持つ人々との交流体験からも、多様な他者と関わり、希望ある未来を共につくるためには、相手の立場や思いなどをイメージ・響感する力がきわめて重要であると考えている。

3 ESDの学習方法の基調、統合の思想を基調とした学習論の提唱

ESDを促進するために有用な学習方法について以下に検討していくこととする。まず、多様な学習論を考察することから始めよう。

(1) 多様な学習論

多様な学習論の典型として現状維持型と革新型、定型型と非定型型、教科準拠型と教科再構築型の学習論を取り上げる。

現状維持型と革新型学習

「現状維持型学習」とは、与えられた問題に対する問題を解決する。繰り返し起こる周知の状況に対応するための確定した見解方法、規則を習得することを目的とした学習の在り方である。一方、革新型学習は、「先見」と「参加」を重視した学習である。「先見」とは、起こり得る偶発的な事件に備えて、長期未来のための代替策検討しようとする姿勢を意味している。「参加」とは形式的でなく、当事者意識をもち、協力、対話、共感していくことである。また「自らがよりどころにしている規則や価値観を常に吟味し、時宜にかなったものは残し、時期遅れになったものは捨てていくこと」も意味している。⁽⁷⁾

定型型学習と非定型型学習

定型型とは、いわば回答が決まっている学習である。知識の伝授 記憶を重視した Teaching-Learning 型学習といえる。年号、漢字、単語の記憶、計算方法などはその例である。我が国の学校教育は伝統的には、知識伝授を主目的とした定型型の学習を重視してきた。比較・効率が重要視されるBad主義の色彩が強い。入試問題の大半は定型型学習による習得型学力を対象にしていると言える。

他方、非定型型学習は、活用型学力、探求型学力の向上を意図する。「引き出す」こと

「探求する」ことを重視した Education-Study 型学習である。答えの決まっていない問題・課題を追究していく。たとえば「この町のよいところを100見つけよう」「地球温暖化を防ぐために自分たちができることを考え、実行する」等が課題となる。教師は学習者の発想、表現を推奨する、Get主義の姿勢を大切にする。

教科準拠 (Canon-Embedded) 型と教科再構築 (Canon-Reconstructive) 型

ESDの希求する人間形成に関わっては、知識の伝授を重視する教科準拠型学習と問題解決能力、批判的思考、表現力、内発的モチベーション (intrinsic motivation) メタ認知的な能力 (meta-cognitive) などの能力の育成を目指す学習との比較については恒吉遼子の言説に示唆を受ける。

恒吉は、教科準拠型の学習の特質を、習得すべきだとされる知識・スキル群がある以上、その「基礎を効率的に伝達する」、「教師による説明、間違いの訂正」「正解の提示などの教師の直接指導」「一斉指導」にあると説明する。

他方教科再構築型学習では、「従来のテストでは測定しにくい、問題解決能力、批判的思考、表現力、内発的モチベーション (intrinsic motivation) メタ認知的な能力 (meta-cognitive) などの能力を指す場合が多い」「与えられた知識やスキル体系の習得、正しい答えに到達することよりも、思考や理解するプロセスや、獲得される内容が子どもにとってどのような意味を持つのか、どのように関係 (レリバレンス) しているのかを問題にする傾向がある」「子どもの興味関心から出発し、部分的事実を個別的に扱うのではなく、コンテキスト (context) を強調し、現在の子どもの持っている知識と個々の学習スタイル (individual differences in learning style and prior knowledge) の違いがあることを前提にして、それに柔軟に対応することに価値を見出す傾向がある」と記す。さらに「知の総合化、教科を横断した学習を好む傾向もある」「知識 (コンテンツ) の受容者、消費者としての子どもに対して、知識の創造 (creation of knowledge) をする者としての子どもを強調する傾向がある」と指摘する。「テーマ、発見、調べ学習など、探究的な性格を持つものが多く、教室を越えた世界へと学習を広げようとする傾向」「対話、ダイアログ、他の子どもとの共同作業なども好まれる傾向」があるとも述べている。⁽⁸⁾

秋田喜代美は、恒吉と同様の趣旨で「深い学習と伝統的な教育実践」について論じ、「いかに深く理解するのか、そのためにいかに精選し、統合的な知識が問題にされている」「さまざまな学習リソースを使用しながら、知識を統合して学ぶ学習観は、テストへと急ぐ単純反復型の学習による量化主義、短時間で扱いやすい教材のパッケージ化、目標からさかのぼって考える分析的スキル思想とは、授業において異なる学習過程を具現化し、違う学力観を示していると言えるだろう」と記しているが、ESDの学習においては秋田の示す「知識を統合して学ぶ深い学習」が有効であると考えている。⁽⁹⁾

(2) 統合の思想による学習

21世紀を生きる人間形成を目指す学習の基本理念、それを筆者は統合（integrate）」の思想と考える。統合の思想を支える下位概念として未来志向性、多様性、関係性、変革性を位置付ける。

統合学の知見は、近年、環境、医療、工学分野で活用されてきているが、その発想は多文化共生社会が現実化している、「ESDは持続可能性にかかわるあらゆる主体や場、取り組みなどをつなぐ（統合する）活動」であり、⁽¹⁰⁾ 21世紀の教育の方向を示すものでもある。

以下に統合の思想を支える下位概念について、その要点を記しておく。⁽¹¹⁾

未来指向性（持続発展性）

今の年代にとってよい社会から次の世代にとってもよい社会をつくる発想（持続発展）
地域や地球社会の問題・課題の解決に多様な他者とともに参加・協働する
当事者意識、主体的な行動力の重視

多様性（多様な見方 考え方）

多数決を原理とする民主主義から、多数決によらない民主主義を具現できる
多様さを発展の要因として活用する。

関係性（共創力）

対立や批判をむしろ活用し、創造的な人間関係を構築する。
「分かり合えない」人々とも「いっしょに」いるための技法の習得
時間・空間・問題のつながりを認知し、思考できる
理解できない状況におかれたときの対応力をつける
居心地の悪さの直視と克服、途絶・断絶・対立・紛争から共存・共生へ

変革性

臨機応変の対応力 他者から啓発され、また多様な体験により自己変革・自己成長できる。

(3) システム思考による学習

システム思考とは、さまざまな事象や関わりを重視して思考することである。地球フラスコ論と比喻されるように、様々な地域の事象が世界全体に波及する現代においては、システム思考は、ESDの希求する人間形成に不可欠といえる。システム思考の要諦をバイクとセルビーの論に見てみよう。

バイクとセルビーの示すグローバル教育の要約

システムに対する認識を高める

- ・システムの視点から思考する能力を得ること
- ・システムとしての世界を理解すること
- ・自分の能力と可能性を全体的なものとしてとらえること

視点について認識を高める

- ・自分たちの世界観は必ずしも普遍的でないことを知ること ・他者の視点を受容する能力を養う
- ・グローバルな問題状況や開発・発展とその傾向についての認識とを獲得すること

地球環境について認識を高める

- ・正義、人権、責任について十分な情報を得た上で理解し、それをもとにグローバルな問題状況、開発・発展とその傾向を理解することができること
- ・地球環境を考慮しながら、未来への方向性を定めること

関わることについての認識とレディネスを養う

- ・個人、あるいは集団で行う選択や行動が、地球の現在や未来に影響することを知ること
- ・草の根からグローバルなことに至るまで、多様なレベルの民主主義的決定に、効果的に参加できるよう、必要な社会的・政治的行動のスキル（技能）を養うこと

プロセスを重視する

- ・学習や人間の成長は、決められた最終目的などない、継続する旅のようなものだと知ること
- ・新しい世界観は活力を回復させるが、同時に危険性を伴うことを知ること⁽¹²⁾

(4) 協同学習

筆者は、統合の思想、システム思考による具体的な学習方法として協働学習を位置づけている。

佐伯胖は「学び合いの共同体」を提唱し、人が文化的に学び合う条件として、各成員が「・他者の視点を取り入れること、共同の善を志向すること、そして ・文化的価値の多様な鑑賞と創造に参加すること」の3つの条件を満たす人々が何らか実践を共有しているとき、それを「学び合いの共同体」と呼ぶ。⁽¹³⁾ 協同学習とは、「学び合いの共同体」の理念を多文化共生社会に対応した人間形成の視点からより具体的に示したものと位置付ける。

神戸大学附属住吉中学校 神戸大学附属中等学校は「生徒と創る協同学習」をテーマに優れた実践研究をしている。この学校の実践研究で基調としたジョンソン,D.W.らによる下記の見解は（2001）、協同学習のあり方を明確に示しているので紹介する。

1. 相互協力関係がある 個人→グループ、グループ→個人の学びが相互協力関係の中で繰り返される。
2. 個人の責任がある 個人が各々の得意分野を生かした主体的な関わり方が必要。
3. メンバーは異質で編成 日本語レベル、国籍、年齢、性別を問わず、異質なメンバーでグループ編成が可能。
4. リーダーシップの分担をする 各々の得意分野が生かせる活動で、役割を担う。

5. 相互信頼関係あり 一人ではできないことも仲間と一緒にだったからこそできたと感じたり、活動の中で互いを認め合ったりするところから信頼関係が生まれる。
6. 課題と人間関係が強調される 課題達成はもちろん、グループのメンバーとやりとりをする中で、人とのかかわり方の大切さも強調される。
7. 社会的技能が直接教えられる 作品を作り上げる過程で、主張、理解、受容、譲歩といった社会的技能を使う。
8. 教師はグループを観察、調整する 教師は、協働学習が円滑に進むように、観察、調整役としてグループを見守る。
9. グループ改善手続きがとられる 毎回の活動後には必ず振り返りを行い、課題達成・協働学習に対して改善の有無、気づき等を挙げ、次の活動に生かす。⁽¹⁴⁾

(5) グローバル時代の共創型対話

統合の思想、システム思考による協働学習を効果的に展開させるためには、対話力が重要なことは論をまたない。グローバル時代に共創型対話について若干の説明を記しておこう。

グローバル時代の共創型対話とは、対話の機能や特色を基本としつつ、多様な他者と共存・共生するグローバル社会に対応するために発展させた対話です。この対話では、世界には「利害が根本的に対立している冷厳な現実」があること、「対立の克服や相互理解は容易ではない」ことを前提とする。

そうした現実を直視しつつ、いかなる相手とも対立を決定的なものにせず、平和裏に危機を克服する、また、共生・共創による市民社会を構築するための有用な手だてが「グローバル時代の共創型対話（以降、「グローバル時代の対話」と記す）なのである。

グローバル時代の対話では、議論を通して新たな発想が生まれること、参加者相互の関係性の深まりを重視する。それは、議論に関する新たな文化を創造することである。知識の集積や論議技法のみでなく、響感力、選択・判断力など、あるいは受容・主体的な態度等をも含めた実践的知能(social competency)であり、21世紀に生きる子どもたちに必須の能力である。⁽¹⁵⁾

(6) ESD推進のための学習論の集約

以上の学習方法に関する分析・考察・検討を基調に、ESDの具体的な学習のあり方を、以下に集約してみた。

1. 専門的知見を深める学習から、さまざまな知を結び、その結び目から新たな視座や領域を生み出す「統合的な知」の育成を目指した協同学習へ
2. 過度の比較・効率重視の競争主義から、関係（レリバレンス）を重視し、参加・協働・共創の原理を追求する学習へ
3. 知識の断片の伝授偏重の学習から、多様な出会いを重視する異種混交学習へ

4. 対立、混沌、困難などをむしろ生かし、新たな知恵や価値を創発する学習へ
5. 予定調和的な学習のみでなく、予測できない課題を解明する学習へ
6. 学習意欲の向上を奨励する学習から、学習者が学習の意味を認識し推進する学習へ
7. 異見や批判に啓発され、多様な体験をなし、自己変革し、自己成長していける学習へ

上記の基本的な考え方に立った学習の効果を上げるためには、「学習課題は、少し難しくし、さまざまな調査方法を実施させる」、「結論だけでなく、プロセスを大切に」、「調査結果だけでなく、自分たちで考察したことや、そこからの提言を出させる」学習を展開させたい。また教師の柔軟な対応、適切なコメントが学習効果を高める。このためには他者と比較し、序列付ける evaluation（評価）から、appreciation（賞賛・理解）としての「子どもの真価を看取ることによって励ます」教師への意識改革が望まれる。⁽¹⁶⁾

4 学習者の実態に対応した学習の工夫

(1) 学習者の実態に対応した学習方法の開発

日々授業をしていて学生（目白大学）たちのようすを見てみると心底心配になる。深い考察、鋭敏な感受性、ものごとの本質を洞察する力が育ってきていない。非常な危機を痛感するのは、深く考える、他者と響き合う、多角的なものごとを見る、さまざまな事象を統合して、新たな知見を生み出すこと、そうした深遠な知的喜びを育む学びを、むしろ、めんどろがり、「深い学びからの逃避」傾向が増幅してきていることである。このことに教育実践者として危機意識をもつ。しかし、学生たちは内面では、成長したい、認められたいとの強い思いをもっているし、よき潜在能力も有している。

ところがときとして、学生たちを十分に引き付け、学びへの意欲を喚起する授業ができない。このことに忸怩たる思いを抱き続けてきた。そうした自分になさげなく、しばしば気落ちしてきた。問題は学習の対象者への配慮であると気が付いた。ESDの提示する学習方法を参考にしつつ、授業中の学生たちの様子を念頭に置き、彼らが学ぶことの喜びを実感し、その過程で事実として成長していける学びを創造しける学習方法を検討してみたい。

(2) キューバの教育に学ぶ

学習者の実態に応じた学習の考察の手掛かりを、ESDの希求する人間形成とも軌を一にすると推察でき、世界で注目を浴びている「格差なき教育大国」キューバの革命的教育法の検討からも模索してみたい。中南米諸国で図抜けて高い学力を育て、世界の教育専門家を驚嘆させ、フィンランドとならんでユネスコがモデル国に推奨したキューバの教育方法の特徴は、吉田太郎氏の論考をもとにすれば次に収斂できそうである。⁽¹⁷⁾

教育に関わる基本的な考え方

識字教育の重視、読み書きができない者は人類の遺産を奪われる。

無知こそが戦争を生む、格差なき公正な競争社会の担い手の育成

教育制度・政策

世界一の教育投資、少人数教室、教育の無料化、子どもが一人でも維持する学校、尊敬される高い専門性をもった教師たち、高校生・大学生の教壇への活用 障害者にも開かれた教育制度、社会人が再チャレンジできる大学

学習方法

「子どもの精神活動は、コミュニケーションや社会とのつながりにより発達する」「子どもたちが自ら知識を構成する」とのレ・ヴィゴツキーの提唱した社会構成主義の学習理論を基調とする。

社会とのつながりをもつ総合教育の推進、社会・自然体験・労作教育の重視、競争でない子ども同士が助け合い学ぶ相互学習の重視、キューバの教育全般については、さらに多様かつ精緻な調査・分析が必要であろうが、本稿では、吉田氏の論考が提示した学習方法を、参考資料として活用することとした。

(3) 学生たちの学習意欲の向上と成長が期待できる学習方法の提言

ESDの提示する学習方法に批判的考察、学習論に関する先行研究の検討、キューバの高学力をもたらしている教育法の援用、これまでの国内のESD推進校の実践研究への参加体験、筆者自身の授業体験などにより、学生たちの学習意欲の向上と成長が期待できる学習方法を提示する。

成功体験の蓄積

学生と交流していて、気が付かされるは、褒められた体験、成功体験の少なさである。このためか、「自分なんか、どうせ・・・」との言い方が度々でてくる。自己肯定感がもてない大きな要因は、成功体験の少なさによると推察できる。こうした学生には、小さな事柄でもよい、目的を成し遂げた体験を学習の中に意図的に持ち込み、蓄積していく必要がある。殊に重要なのは、他者とともに共通の目標に向かい達成した成就感を得る体験をさせることである。

督励から説明へ

少し心身に負荷がかかる学習、時間がかかる活動を展開しようとする、と、「かったるい」「なぜこんなことする必要があるのだ」と、忌避する学生の姿がある。こうした学生たちには、ただ意欲の喚起を命ずるよりも、学習の目的、内容、意義などを説明する必要がある。できるだけ具体的に、たとえば「聴く」ことはなぜ重要なのか、あるいは、この学習が自分の将来にどう生きるかといったことを、分かりやすく説明する必要がある。

学習プロセスの工夫

三分法による授業の進行：授業を3つにわけると、たとえば、教師の講話→協働学習→内在化の時間、目標の確認と本時の学習の進め方の共通理解→グループ活動→発表と質疑応答、教師の説明→映像視聴や外部講師に講話→感想の話し合い、といった学習プロセスを3つにわけ進行させると集中が継続する。授業づくりはドラマづくりであり、静的場面と動的場面、盛り上がる場面と、余韻を楽しむ場面など意図的に変化をつけ展開させる工夫もときには必要と思える。

学習者のシステム化

現代の学生の一般的傾向として、知的学力のみならず、感性・感覚、興味・関心、耐性、成育歴などが多元・多層化している。こうしたさまざまな学生を対象とした授業では、教師と学習者の図式だけでは効果的な展開は至難なことが多い。

対応する手立てとして、学習者をシステム化することが効果的手法である。たとえばグループづくりでは、学習の目標に応じた異なる体験を持つ集団づくり、グループ内での役割分担の明確化などである。協同学習の実践的研究を進行している神戸大学付属中等教育学校では、すべての教科の授業を四人組で進行し、グループの中に「もりあげ係り」などを位置づけ学習効果を高めている。

知の拡大

学校の中の学習にとどめず、多様な人、モノ、事象、歴史的遺産、自然環境などを活用し本物の知に出会わすことはESDが提示する21世紀の人間形成に効果的であり、学生の学びへの意欲を喚起できる。本物との出会いから、啓発され、実感させられ、心揺さぶられることにより、視野が広がり、思考が深まり、それは学ぶことの喜びを体得させていく。

情緒の豊かさ感性の鋭敏さを生かす

学校教育においてはとかく、「読み・書く・算盤」の力、記憶力などを重視しがちだが、情緒の豊かさや感性に鋭敏さは、人間としての大切な資質である。授業中、退屈そうにしていた学生が、小学校での実習で小さな子どもたちに実にやさしく対応している様子を見て、彼女の教員としての資質の高さを知った思いを持ったことがあった。人の心に鋭敏に感応できる情緒・感性を活用した学習を意図的に重用することも必要であろう。

座学より冒険心を生かす。

現代の学校教育は、机に向かい学ぶ座学を中心とする傾向がある。このことはともすると若者の性向を十分に発揮させる機会を乏しくしているようである。マーク・トイーン作品の主人公トムソーヤーやハックルベリーに生き生きと描かれているように、郊外で自由に活動することを好む。ときにはこうした活動的な学生を満足させる冒険心に富んだ学びを取り入れたい。

現場性と身体性の重視

現代の学生がさまざまな体験をしてきていないことは人間形成にかかわる大きな問題で

ある。社会・自然体験、成功体験、挫折体験、共創体験などを学習に意図的に持ち込みたい。殊に重要なのは「心揺さぶられる体験」をさせたい。このことが学ぶことへの関心を高める契機となる。心揺さぶられる体験の例を挙げておく。

ボランティア活動 特別養護老人ホームでの介助補助、外国人子女の日本語指導 小学校の教育活動への参加 災害地への支援活動 朗読ボランティア
 生命と関わる体験 小動物の飼育、植物の栽培、海辺の生物の観察、農作業体験 対話を活用した体験 中学生との協働学習、他学の学生との論議、多様な人々との交流

体験の活用とは、学習における現場性と身体性の重視に他ならない。留意すべきは事前・事後の指導である。体験はさせれば学習効果が上がるとは限らない、事前に意義を伝え、事後に得たものを内在化させる機会を持たせることが肝要である。

規範意識の醸成

- ・授業こそ教育活動の基本である。このために授業規律を明確にし、徹底する
- ・学級づくりを重視し、中学生たちに社会性を身に付けさせたい。
- ・どの子も受け止め、大事にし、育てていく。

上記は、荒れた中学校を3年間で立て直し、生徒たちが学習意欲を高め、主体的に活動するようになった山梨県の中学校の実践目標である。授業規律とは、聴くこと、返事をする事など、授業の基本をきちんと守ること、社会性とは挨拶をすること、他者と協力し合って行動することなどである。この学校の実践が成果を上げたのは、こうした方針を教職員に徹底させたことである。学生たちは、規範意識について指導された体験も乏しいのではない。「どの子も受け止め、大事に、育てていく」とは、見捨てず指導することである。押しつけでなく、学生を納得させつつ、授業規律、社会規律を順守させることは、結果的に学生の学びへの意欲を高めていくことになると確信する。

競争でなく、助け合いつつ学ぶ協働学習

「異文化共生マップづくり」は、協働学習の例である。この学習では5～7名がチームとなる。自分たちが調査したい地域を決める。地域に実際に生き、異文化調査の視点から発見したことを記録する。たとえば、様々な国の料理を出すレストラン、教会・モスク、民族品の売店、電柱の表示等である。1枚の模造紙の中心に調査地の地図を張りつけ、周囲に調査して発見した施設や掲示物等と書き込み、地図を完成していく。成果を報告する。この学習では、必然的に参加者が助け合わなければならない。事後、親しみが増している様子がみられるのが常であった。劇づくり、地域調査、物語の作成、演奏・合唱、世界旅行プランの企画、模擬レストラン経営、無人島に理想の国づくりの企画、等々、仲間と高いハードルに向け、助け合いつつ活動を進める学習は、一人一人が自己の可能性に気づき、自己肯定感を高め、他者の存在に良さを実感しつつ、本学の学生のよさを引き出すと期待できる。

教育機器の活用

現代の若者はパソコン、IPadなどを自在に操作できる子が多い。この良さを活用する実践も学習意欲の喚起に有用であろう。博物館や地域を調査し、その映像にコメントを記し、相互に配信する学習、小論文やエッセイを相互批評する学習、人気にあるアニメのキャラクターをいくつか集め、新たなストーリーを共創する学習、BGMの活用、1分間自己主張VTR制作、日本人を語る8枚の写真の作成等々、学生たちが興味をもち、また得意である多様な教育機器を活用した学習を取り入れることも必要となろう。ただ、教育機器の活用は、作業が楽しみだけになることが危惧される。その教育的意味を考察しておくことが不可欠であろう。

おわりに

ESDは、21世紀の人間形成及び希望ある社会づくりのための有用な教育理念である。しかし問題はその理念を実践に結びつけることである。学習方法の検討はそのための基本作業である。本論考においては、ESDの理念とその具現化のための学習方法について検討してきた。

ただ、より効果的な学習論を提示するためには、ESDを研究課題とし取り組む学校の実践研究事例の分析が不可欠である、例えば、江東区立八名川小学校では、各教科、道徳、特別活動の年間計画とESDの学習内容を関連付けたESDカレンダーを作成している。この学校では、研究授業において、ESDの学習目的が、どのように活動に結びついているかを明示した学習案づくりに取り組んでいる。奈良教育大学附属中学校では、統合の思想を基調においてESDの実践研究を推進している。教科横断的学習、生徒の多様な体験、意見を統合し、そこから新たな発想を生み出す共創型アプローチによる取り組みは、新たな学習の在り方を示している。広島大学附属高校では、ESDの実践をテーマに研究を継続的に進めてきている。

こうした多様な実践校の成果を分析し、考察を加え、ESDの実践方法を体系化することが今後の課題と考えている。「教育問題と教育改革の理念のあいだに、実践主体として教師がある。教師の実践力の開発が、教育改革のカギとなる」。(18) ESDの推進に関わる現職研修、教員養成に関わる課題の追求については他日を期したい。

「教育は事実として学習者を成長させたとき意味をもつ」とは筆者の信念である。拙論で集約した学習論を本学での教育活動に援用し、本学学生の成長に資する授業等を展開していくことが使命と自覚している。

【注記】

- (1) ユネスコ国内委員会 『ユネスコスクールと持続発展教育（ESD）について』, 2008 参照
- (2) 「日本の国際実施計画への具体的な提言（総論）」, 2005 参照
- (3) ユネスコ国内委員会, 前掲

- (3) 多田孝志 手島利夫 石田好広 『未来をつくる教育ESDのすすめ』日本標準, 2008 参照
- (4) 関連庁連絡会議「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画報告書, 2011 参照
- (5) 国立教育政策研究所「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究中間報告書」, 2011 10頁
- (6) ローマ・クラブ『限界なき学習』, 1972 参照
- (7) 恒吉僚子「グローバル化社会における学力観」, 異文化間教育学会紀要『異文化間教育』12 参照
- (8) 秋田喜代美「質の時代における学力形成」東京大学学校教育高度化センター編『基礎学力を問う』東京大学出版会, 2009 199～200頁
- (9) 阿部治 川島直『次世代のCSRとESD』ぎょうせい, 2011 30頁
- (10) 多田孝志「統合の思想による学習の提唱」, 森茂岳雄 中牧弘充 多田孝志『学校と博物館でつくる国際理解教育』明石書店, 2010
- (11) グラハム・バイク、ディヴィット・セルビー共著 阿久澤真理子訳『地球市民を育む教育』明石書店, 2004 p 54～55 抜粋
- (12) 佐伯 胖「学びの転換」, 佐伯 胖他編『授業と学習の転換』岩波書店, 1998 23頁
- (13) 神戸大学附属住吉中学校 神戸大学附属中等学校『生徒と創る協同学習』明治図書, 2009 35～42頁
- (14) 多田孝志『授業で育てる対話力』教育出版, 2011 3～4頁
- (15) 多田孝志「学校におけるESDの進め方」, 文部科学省教育課程課編集『中等教育資料』N o 895, 2010
- (16) 22～23頁に加筆
- (17) 吉田太郎『世界がキューバの高学力に注目するわけ』築地出版, 2008
- (18) 和井田清司『戦後日本の教育実践』学文社, 2010 1頁

(平成23年11月9日受理)